

『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』 の文化的諸相 —ベースボールと帝国主義—

朝 日 由紀子

マーク・トウェインの『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』（1889年）は、『サイエンス・フィクション事典』によれば、「タイム・トラベル」を扱った最初の小説とされる。19世紀のアメリカから6世紀のイングランドへと、一挙に時空を越えるそのプロットは、奇想天外であり、その際立つ文学的趣向に関心が引きつけられるが、この作品を分析する批評家にとっては、短絡的な解釈を容易に許さない作品である。

作品構成は、マーク・トウェインの最初の作品「キャラベラス郡の名高き跳び蛙」と同様、「入れ子構造」をとっている。はじめに、「説明を一言」という序が設けられ、ウォリック城で「奇妙なストレンジャー」と出会い、奇妙な会話をかわした「私」が登場する。ごく親しい者のように円卓の騎士のことを語るそのストレンジャーは、「私」に「魂の転生」と「時代と体の転位」を知っているか、尋ねたのである。その夜、「私」の部屋を訪れたストレンジャーは、「ぼくはアメリカ人です。生まれも育ちもコネティカット州ハートフォードですから、正真正銘のヤンキー（“a Yankee of the Yankees”）」で、実用本位の技術者であり、詩情などほとんど皆無の人間です、と語り始める。ハートフォードは、回転式連発拳銃の発明者サムエル・コルトが1855年に建てた世界最大の銃器製造工場で有名になったが、この語り手は、それを連想させる「大きな銃器工場」の監督責任者で

あった、という（はっきりと「コルトの工場」に言及されるのは8章）。このように語り始めるが眠気に襲われ、話し続けられなくなった語り手は、自分の手記を「私」に預ける。こうして、「私」はそのストレンジャーの手記を読み始めたことが、この序で説明される。

その手記は、1章の「キャメロット」から始まり、43章の「サンドベルトの戦い」の最後、「ここで記録を終わりにする」のことばで閉じられている。その後、この手記を綴ったハンク・モーガンの右腕であったクラレンスの「あとがき」が続き、さらにまた「M. T.による後記」で、はじめの「私」が再登場するという念入りな「入れ子構造」となっている。「キャラベラス郡の名高き跳び蛙」では、賭け好きのジム・スマイリーの逸話を延々と続けるサイモン・ウィラーの話を、不本意ながら聞く「私」は、フロンティア独特の語り口への導入役を務めるにすぎない。だが、「M. T.による後記」を記す「私」を、マーク・トウェインと結びつけるとき、夢うつつで「革命」や「イングランドの騎士制度を絶滅させた」と口走るハンク・モーガンの最期の姿を伝える「私」は、「ヤンキー」の意味する革命とは何であったのか、あらためて読者に解釈の必要性を迫ってくるのである。

マーク・トウェインがコネティカット・ヤンキーを主人公にした作品に着手したのは、1886年である。講演旅行に同行していたジョージ・ワシントン・ケーブルから勧められた、サー・トマス・マロリの『アーサー王一代記』（*Le Morte Darthur*, 1458）を読み、作中の「遍歴の騎士」のイメージがマーク・トウェインの心に焼き付けられていた。マーク・トウェインの「アーサー王宮廷」にも、アーサー王の「円卓の騎士」の名高き騎士ランスロット、王妃グイニヴィア、アーサー王の妹モーガン・ル・フェイ、魔術師マーリンなど、「アーサー王伝説」を形成する重要人物が登場する。だが、コネティカット・ヤンキーの物語のモチーフは、「アーサー王」で

はなく、「騎士」であることは間違いない。マロリの意図が騎士道精神を賛美するところにあった『アーサー王一代記』と異なり、ハンク・モーガンは、騎士道精神を揶揄し、有名無実なものとし、さらには騎士制度を壊滅させるという破天荒な企てをする人物として造形されているのである。

以上を踏まえ、とりわけ本論では、騎士をめぐる物語が、笑劇から悲劇へと転回していくなかで、技術文明一本槍のヤンキー的性格に加えて、モーガンの複合的性格、言い換えれば、19世紀アメリカの文化的諸相を反映する性格が見えてくる点を重視し、考察していきたい。

まず、騎士との最初の出会いから見ていこう。ハートフォードの工場にいたモーガンは、かなてこで作業中、部下の一撃を受け、気絶する。意識が戻ったとき、オークの木の下に座っていたが、そばには古い時代の鉄製の甲冑に身を固め、盾と剣と槍をもち、馬上から見下ろしている者がいた。モーガンは、サーカスに戻るよう諭すが、その相手は本気になって槍をむけて向かってくるため、木の上に逃げざるを得ない。やむなく降参したモーガンは、サーカスに戻るはずのその男に従っていく。だが、いこうにサーカスらしきものは見当たらず、つぎに推測したのは精神病院であったが、それにも行き着かなかった。そこで、モーガンは、ハートフォードからどのくらい遠くに来たのか、たずねる。その名を聞いたことがない、と相手は答えるが、モーガンは、嘘にちがいないと思う。それから1時間してようやく遠くに谷間の町と、丘には大きな灰色の要塞が見えてくる。それを指してモーガンが「ブリッジポートか」と聞くと、それに対しての答えは「キャメロット」であった。

盾と剣と槍をもった鉄の甲冑姿の人間が、サーカスで空中ブランコや綱渡りをするとは考えられないが、まっさきにモーガンの念頭に浮かぶのがサーカスであることは注目していいであろう。しかも、「ブリッジポート」は、当時だれもが知っていたP. T. バーナム（1810-1891）の本拠地であっ

た。バーナムは、1871年に自分のサーカス団を編成し、1876年の独立百周年記念の年の3月、マーク・トウェインに宛てた手紙で、空前の「最大最高のサーカス」を予定し、それは独立百周年を祝うにふさわしいショーになるとアピールしている。前年の1875年にも、マーク・トウェインに、大々的なツアーの企画を熱っぽく伝えたバーナムであった。まず、1万1千人収容できる巨大テントを作ってボストンに運び、750頭の馬、ラクダ、象、バッファローなどの動物を鉄道で運んだこと、また、夏には125の車両を使って、ニューイングランド、中部諸州と西部諸州を巡業し、多種多様なショーを見せる企画である事などくわしく説明している。マーク・トウェインは、1876年出版の『トム・ソーヤーの冒険』の16章で、少年たちの「サーカス遊び」の場面を描いている。どの少年も「道化師」になりたがる。道化師が一番観衆の注目を集めるからである。サーカスを遊戯の一種としてではなく、ショーとしての華麗さ、驚異と興奮を生き生きと表現した作品は、『ハックルベリー・フィンの冒険』（1885年）である。その22章で、ハック・フィンが、「紳士と貴婦人みたいな」豪華な衣装で入場してきた馬の乗り手たちが披露する驚くべき曲芸と、それに続くハプニング―酔っ払い客の抱腹絶倒な芸当と最後の見事な変身が巻き起こす興奮を体験するのである。バーナムは、1887年、ジェイムス・ベイリーと提携し、「バーナム・アンド・ベイリー サーカス」という当時最大のサーカス団を結成する。まさにバーナムは、19世紀最大のショーマンであった。

コネティカット・ヤンキーは、同じコネティカット人のバーナムのショーマンシップを反映し、アーサー王宮廷にはおよそ馴染まないショーマンぶりを発揮する。「サーカス」という言葉も、前述の場面だけでなく、2章「アーサー王宮廷」で、はじめてアーサー王の「円卓」を見たとき、「それは、まるでサーカスのリングみたいに大きかった。」と表現している。そして、「円卓の騎士たち」に対しては、子どもみたいに無邪気で、どんな

嘘でも信じ込んでしまうと評する。こうした感想は、ひいてはだましやすすい人々をいかに驚倒させるか、大向こうを唸らせるに似た効果をねらうショーマン的性格を強めたといえよう。

6章の「日食」では、遍歴の騎士によって囚われの身となったモーガンの処刑がすぐにも執行されようとしたとき、魔術師マーリンの向こうを張って、モーガンは自分も魔術師であると偽り、仰々しい身振りで「みごとな効果」をおさめ、危機を脱する。528年6月21日の「皆既日食」の知識を利用して、アーサー王と王妃、その場の大勢の人々の前で、魔術師として世界が真っ暗闇になることを予言し、太陽が隠れるタイミングに合わせて、太陽を指差してみせる。王の懇願により、太陽を再び呼び戻したモーガンは、アーサー王に次ぐ地位を獲得するのである。政治的権力をもったモーガンに敵愾心を燃やすマーリンを投獄し、さらに対抗上、マーリンの石塔を天上の火で爆破すると宣言する。この奇跡を起こすため、モーガンは、内密に爆破用の火薬を製造し、期待通りの「効果をあげる奇跡」を起こす。古い塔は、空中に吹き飛び、大噴火のような火が、夜を真昼に変え、非常な恐怖から大勢の人間が地面にひれ伏す光景を露にしたのである。これ以降、モーガンは、「ザ・ボス」という敬称で呼ばれるようになり、さらに驚異を起こすことが期待される。

モーガンのショーマンシップが余すところなく示されるのは、23章の「泉の回復」である。僧院長から、教会の枯れはてた泉に水を取り戻すことを依頼され、モーガンは、ポンプ、鉛のパイプ、ギリシャ火薬、電気器具などを準備する。「無知な種族」に驚異の目を見張らせるために、「すべての小道具が公衆の目に強い印象を与える」ように細かい点に気を配る。そして、「効果をねらう」上で大切な「演技の滞り」(“stage-wait”)の時間を計る。モーガンによれば、「観衆が期待を高めるチャンスをもつことはつねに良い事」なのである。モーガンの演出による、ラテン語の聖歌が

夜のしじまに響きわたり、それが終ると、モーガンは壇上に立ち、2分間、顔を上げ、手を広げる。それは、人々を静かにさせる効果を生み出すためである。それからゆっくりと摩訶不思議なぞっとするような長たらしい言葉を唱え、人々を恐怖によるパニック状態に陥らせるすごい効果がある。機を逃さず効果を畳み掛けるモーガンは、手を高く上げ、苦悶の声でさらに長い言葉をうめきながら発する。これを3度繰り返した後、僧院長にむかって、呪文は解ける、と宣告する。そして、聖なる泉から突如水が噴出したとき、人々は、恐怖から一転して歓喜の声を上げたのである。モーガンは、魔術ならぬ技術を用いて奇跡を起こしたが、その絶大な「効果」は、計算された演出によって達成されたといえるであろう。

1870年代、80年代のアメリカは、ショービジネスの他にも、さまざまな分野で新しいビジネスを生み出した。“the cattle industry”もそのひとつである。南北戦争後、牛肉に対する需要が高まり、シカゴが精肉業の中心地となると、シカゴにつながる鉄道始点まで、テキサスから牛を駆って旅するカウボーイが登場してくる。1870年代後半には、カンザス州ドッジ・シティが、50万頭の牛を運ぶ最大の輸送地となった。1880年代になって、自分の土地を守ろうとする農場の人々によって「有刺鉄線」が張られ、それまでの囲いのない広大な土地が次第に囲い込まれるようになり、さらに1890年代には鉄道が飛躍的に発達したこともあり、牛を駆る仕事は不要となっていく。しかしむしろ、そうしたビジネスの盛衰のなかから、カウボーイは、独自の文化を生み出していくこととなった。カウボーイ文化は、フロンティアと騎士道精神の名残をとどめるヴィクトリア朝価値観とが結びつき、牛を駆る特殊な技術と、フロンティアでの危険や困難に屈しない精神や独立独行の精神を兼ね備えるカウボーイに対する憧憬が生み出したといえるであろう。

カウボーイが活躍した時代の人間とはいえ、ヤンキーのモーガンがどこ

でカウボーイの技術を習得したのかと思うほど、驚くべき投げ縄の技を披露するのが、39章の「ヤンキーと騎士との戦い」である。「騎士の遍歴生活」を廃止することに執念を燃やすモーガンは、その一念で槍と剣をもたずに騎士の一団に立ち向かう。ヤンキー・カウボーイの描写は、まるで西部劇を見ているかのようなのである。相手が向かってくると見るや、馬の鞍の前橋から投げ縄をはずし、右手で輪を握る。そして、頭の上で大きな円を描くように投げ縄を振り、相手との距離が40フィートに狭まったとき、蛇のようにとぐろを巻いた投げ縄を投げ、それは空を切って届き、その瞬間縄はぴんと張ってサー・サグラムアを鞍からぐいと引っ張ったのである。これまで見たこともない離れ技に、センセーションが巻き起こり、あちらこちらからアンコールを求める声が沸きあがった。こうしてつぎつぎとアンコールに応じて、モーガンが5人の騎士と戦った後、円卓の騎士のなかで最も偉大なサー・ランスロットが登場する。今まさに4千人の崇拜のまなざしを受けているランスロットだが、投げ縄で引っ張られ、仰向けに倒れる。万雷の拍手で迎えられたヤンキー・カウボーイは、投げ縄を輪にして、鞍の前橋にかけながら、勝利の栄光を味わう。「騎士道は消滅した」ことの満足でもあった。だが、このときが、ショーマンシップを発揮した最高の、そして最後の見せ場であったといえよう。この直後、意外にも再び戦いを挑むサグラムアが現れ、しかもマーリンが、モーガンの気がつかないうちに投げ縄を盗み去ったのである。投げ縄を失ったモーガンは、こんどは竜騎銃でサグラムアを仕留める。それまで1対1の対決であったのが、ここで銃を手にしたモーガンは、「イングランド全部の騎士に挑戦する」と宣言し、回転式連発銃を両手にもち、つぎつぎと狙い定めて騎士を射殺していく。この光景は、同じ西部劇でも銃をもたないインディアンに向かって、白人が相手かまわず銃を乱射するシーンを連想させる。これを43章の「サンドベルトの戦い」での大量虐殺への導火線となる場面である

と解釈するとき、ここでのモーガンの言葉、「騎士制度の命運は尽きた。文明の進行が始まった。」は、象徴的な意味合いを帯びてくる。

39章で使っていた言葉“yank”や動詞形の“boss”など、いくつかモーガンは19世紀に初出の新しい言葉を用いている。そのほかに、6世紀人には到底わからないベースボール用語を何回か口語表現として使い、また、ベースボール・チームの結成後には愛情をこめて選手たちを表現する際用いている点は、注目できよう。たとえば、7章で、魔術師のマーリンに向かって、つぎのようにいう。「何も害になることをしていないのに、君はわたしを火あぶりになればいと望んだし、私の専門についての評判をだめにしようとしてきた。だから、君の塔を吹き飛ばすつもりなのだ。しかし、君にチャンスを与えてフェアにしよう。さあ、わたしの魔力を破り、火を防げると思うなら、打席に入ってくれ。君のイニングだ。」モーガンのここでの発想は、「フェア」ということだろう。ベースボール・ゲームでは、打撃のチャンスは、交互に入れ替わる。それが公平なルールである。15章では、マーリンにいった“step to the bat”と似た意味で、サンディには“Go to the bat.”という言い回しを使っている。

マーク・トウェインは、『コネティカット・ヤンキー』出版と同じ年の4月8日、ニューヨークの有名なレストラン「デルモニコ」で開かれた「ベースボール デイナー」に招待された。それは、シカゴ・ナショナル・リーグ・クラブの会長 A. G. スポールディングが資金を提供して、「オール・アメリカンズ」と「シカゴズ」の2チームを率いて世界を回り、帰国したことを祝うために催された。滞在国は、ハワイ、ニュージーランド、オーストラリア、セイロン、エジプト、イタリア、フランス、最後がイギリスであった。そのワールド・ツアーの目的は、そのころアメリカのナショナル・スポーツとなっていたベースボールを世界に宣伝することであったが、それはいわば文化伝搬を目指すものであったといえるであろう。その

晩のメニューは、9イニングで構成され、スピーカーの席は、それぞれベースボール・チームのポジションに対応しており、マーク・トウェインは、遊撃手であった。スピーチでは、トウェインは、ベースボールを時代精神と結びつけ、「ベースボールは、まさに象徴そのものである。激情的で、猛烈な勢いで急激な発展をしている19世紀の活力と気力、突進と闘争が、はっきりと目に見える形で現れている」と語っている。

マーク・トウェインがスポールディングを見るのは、そのときが初めてではなかった。1875年ハートフォードで、1874年創設のハートフォードのチーム、ダーク・ブルーズと強敵ボストン・レッド・ストッキングズとの試合をマーク・トウェインが観戦したとき、ボストンの投手がスポールディングであった。ベースボールに対する人々の熱気をマーク・トウェインも共有していたといえる。ハートフォードのダウンタウンの人通りが絶えるほど、大挙して球場につめかけ、75セントの予約席は、紳士淑女でいっぱいになり、50セントの屋根のない席は入りきれない人々であふれ、フェンスをよじ登る少年たちの大群を阻止するのに、8人の警官の分遣隊が送られた。

その翌年の1876年、ナショナル・リーグが結成され、メジャー・リーグによるベースボールが始まる。このとき、8球団が誕生し、その本拠地は、シカゴ、セントルイス、ハートフォード、ボストン、ルイヴィル、ニューヨーク、フィラデルフィア、そして、シンシナティであった。マーク・トウェインがベースボールの熱心なファンであり続けたことは、1886年8月7日のセントルイス『ポスターディスパッチ』紙でも、ハートフォードの地元チームを支援するため、気前よく寄付をしている、と報道されたことからわかる。マーク・トウェインは、水泳、テニス、ゴルフといったスポーツも好んだが、アメリカのナショナル・スポーツとして発展していくベースボールにアメリカ文化のエッセンスを感じ取っていたにちがいない。

そのようなマーク・トウェインが、アーサー王時代にベースボール・チームを作るという構想を作品に取り入れたことは興味深い。6世紀を19世紀化する目的で、モーガンが文明化政策、人民教化政策を推し進めた点と異なる意味合いがあると思われるからである。騎士制度を廃止して3年が経過した40章で、中世騎士の馬上試合のかわりに、モーガンは、ベース・ボール（“base-ball”）を流行らせるためのプロジェクトを起こす。当面の批判をかわすため、「わたしのナインは、能力ではなく、身分で選んだ。二つのチームには、王位についていない騎士はひとりもいなかった。」チーム作りを語っていくモーガンの口調は冗談を混じえ、じつに軽妙である。また、球場での試合の描写は、ほら話のように滑稽であり、時に過激でもある。「どの方角にれんがを投げて、王を不具にしてしまわないわけにはいかない」ほど、アーサー王の周りには、「供給過剰」といえる「王」がいる、という。「このような人びとに鎧兜を脱がせることはできない（入浴する時でさえそうしないだろうから。）」ので、ひとつのチームは、鎖かたびらの外套（アルスター）をユニフォームにし、またもうひとつのチームは、新しいベッセマー鋼製の板金よろいがユニフォームである。「ベッセマーズ」対「アルスターズ」の練習試合は、モーガンがこれまで見た中で、「一番すばらしいもの」だったと語る。そして、その模様を目の前に見ているかのように生き生きと選手たちの動きを描写していく。アンパイアには、はじめ身分のない者を任命したが、それを中止せざるをえなくなったという。なぜなら、両チームの選手たちは判定に容易に納得せず、「アンパイアの最初の判定は、たいいてい最後の判定だった。」選手たちは、アンパイアをバットで二つに裂いてしまうので、板戸に乗せてアンパイアの友人が家まで運ぶことになるのである。試合に生き残るアンパイアはなくなり、審判の仕事は不人気になったという。「はじめての公式試合は、まちがいなく5万人集めるだろう、生粋のファンであれば、どうあっても

見る価値のあるものだから。それにいまは、さわやかな美しい春だ。自然は、新調した服で装いをこらしている。」40章の終わりに書きとめられている、ベースボールの試合の開始と春の訪れに期待をこめた言葉を引用したのは、次の41章から43章のカタストロフィにむかって急転直下の展開となっていく、対照の異様さに注意したいからである。

41章では、教会が「禁止令」を発令し、モーガンが築いてきたイングランド中の「すべての美しい文明」を消し去ってしまったことが判明する。国政の最高権力者として、モーガンは、過去3年間に文明化を徹底的に推し進め、その成果に満足を感じていた。学校や新聞を作ったほか、著述業まで誕生させた。ユーモリストのサー・ダイナダンがはじめての作家になるのだが、モーガンが講演者について、言ってもいない古臭い不快な冗談を削除しなかったため、出版禁止にしたばかりか、ダイナダンを絞首刑にした、と何気なく語る。このような権力の行使は、17章の「宮廷の晩餐会」で、新しい曲の楽団演奏を聞き、王妃は、晩餐会后その作曲家を絞首刑にしたことと同断といえるであろう。

蒸気と電気の時代であった19世紀の代表的な発明品、電信、電話、蓄音機、タイプライター、ミシンなども導入したが、モーガンは社会改革に着手し、騎士の遍歴経験を生かして、予約販売員に転身させる。モーガンは、「騎士たちを最も効果的に文明を広める者」に変えたというが、その仕事内容は、分割払いによるミシンのセールスやメロディオン、有刺鉄線、あるいは禁書などの注文取りに回ることである。

しかしながら、モーガンの野望は、いっそう根本的な制度変革、「革命」をめざすところにあった。ひとつは、カトリック教会を廃止し、国教ではないプロテスタント教会を打ち立てること。もうひとつは、アーサー王の亡き後、それは、「王」がモーガンと同じ40歳なので、30年後のことになるが、そのとき「共和制」にすること。モーガンは、初代大統領になりた

いと切望し始めていた。

だが、すべては潰えたのである。キャメロットの城に戻ってみると、まるで墓場のように暗く陰気で、事態が一変したことを物語っていた。

そして、つぎの「戦争！」と題された42章で、モーガンは、クラレンスとともに全面戦争に突入する。モーガンは城のなかに一人残っていたクラレンスを見つけ、不在中に起こった「恐るべき大惨事」について報告を受ける。王妃グニヴィアとサー・ランスロットの関係を、甥のサー・モルドレッドらがアーサー王に告げ口して、敵対するようになった二人のどちらか、すなわち、アーサー王側かサー・ランスロット側にイングランド中の騎士たちが分かれ、内乱となった。王は、王妃に火刑の宣告をしたため、ランスロット側は王妃を救出したが、その際、モーガンとクラレンスの良き友人であった幾人もの騎士たちが殺された、とクラレンスはその名を挙げる。その名を聞き、モーガンは、心が引き裂かれる思いがする。サー・ギリマーと聞くと、「わたしに属するナインのうちで最高だった。なんと巧みな右翼手だったろう！」といい、また、「サー・レイノルズの3兄弟…」と聞くと、「無類の遊撃手だった！地を這うような当たりを、歯でキャッチしたのを見たことがあるのだ。」

いまやアーサー王は世を去り、王妃は修道女になっていることを知る。そして、教会が生き残った騎士たち全部を召集し、支配者になっていると告げられる。クラレンスは、このような急変のなか、ひそかに52人の少年たちを選び、マーリンの洞窟を包囲攻撃のとりでとして準備していた。今後の戦略をふたりは検討し、12の「金網のフェンス」を建設し、それにつながる強力な電線をどのように洞窟の大きな発電機と連結するか、モーガンは技術的問題の解決をはかる。それから、回転式機関銃のガトリング砲と、ダイナマイト爆雷の手配の確認をおこなうが、モーガンの直弟子のクラレンスは、すべて教えられてきた通り、準備していた。モーガンは、防

御ではなく、攻撃が自分のやり方だといい、「共和制国家」宣言を行うと
いって、クラレンスを驚かす。「ザ・ボス」と署名し、「マーリンの洞窟」
という場所もその宣言書に記したので、クラレンスは、居場所を知らせる
ことになり、すぐにも敵を招き寄せることになると心配するが、モーガン
は、むしろそのことで、相手側の「イニング」になったと語る。

最終章は、その先制攻撃の後1週間がたち、モーガンは自分の思惑通り
に「人民」が動かなかったことを知る。「共和制国家」宣言を歓迎したの
は、たった1日だけで、教会や貴族やジェントリー階級が不機嫌な顔を向
けると、みな縮みあがって羊のように従順になり、いまでは「共和制に死
を！」と、いたるところで叫び声が上がっている。全イングランドが一丸
となって自分たちにむかって行進してくるとは、モーガンの予想をはるか
に超えていたのである。

その事実には52人の少年たちはひるむ。モーガンに、同じイギリス人とし
ての骨肉の情を訴える。「どうかぼくたちに自分の国を破壊するよう求め
ないでください。」モーガンの教育機関で、7年から10年かけて「迷信」
と絶縁した環境において訓練してきた14歳から17歳の少年たちを前にして、
モーガンは、つぎの「冗談」をいって少年たちの悩みを吹き飛ばす。「君
たちは、えーと、あの3万人の騎士がこわいのか？」

騎士たちの行軍が近づいてきたとき、モーガンは、ボタンに触れる。そ
の爆発で、すべての「気高い文明—工場」は、地上から消滅する。敵に自
分たちの武器を利用させないための処置であった。「文明—工場」とは、
殺戮武器の製造工場と同義であると思えるモーガンの言葉である。このと
きのダイナマイトの爆発力は、すさまじく、見える限り生存者がいなくなっ
てしまったのである。モーガンは、「死人を数えることはできなかった。
なぜなら個人として存在していなくて、鉄とボタンとの混ぜ物といっしょ
に、同質の原形質となっただけの存在であった。」この箇所は、直ちに原

爆投下の情景を連想させる。「72歳のカート・ヴォネガットによる、マーク・トウェインの『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』の感想」と題するエッセイ（1996年）で、第二次大戦中、ドイツのドレスデンで爆撃による大虐殺を目撃したヴォネガットは、「まだ53歳の若鶏だったとき、マーク・トウェインは、この本ですでに人間の条件は絶望的であるという結論に達していた」と述べ、第一次大戦、第二次大戦、そしてハイテクによるあらゆる残虐行為を見ていなかったのに、そのような結論に至ったマーク・トウェインの作家的心情に思いを寄せている。

そのような光景を目の当たりにしながら、モーガンは、さらに自分の軍隊に向かって「戦争は終わっていない。われわれは騎士を一人残らず殺す」と勝利宣言のなかで読み上げる。恐るべき破壊力をもつダイナマイトに慣れたモーガンには、もはやフェア・プレイの精神は残っていない。

モーガンは、クラレンスと夜の見回りに出て、はじめてフェンスの電流によって焼死してまもない騎士を見るが、さらにそこに近づいてきた騎士が、仲間の騎士に気づき、肩に手を置いたとたん感電死する様子を目撃する。この同じフェンスには15人もの騎士の死体があり、どれほど電流が強力か知る。モーガンは、つぎつぎとほかのフェンスにも電流を送り、ついには3つの死体の壁が築かれる。さらに、すべてのフェンスに電流を通し、1万1千人の死の苦悶の声を耳にするが、残りの千人ほどの敵を見て、モーガンは、敵軍との間の大きな溝に怒涛のような水を流し、溺死させ、さらに13のガトリング砲を発砲する。砲火のあと、敵軍は全滅、モーガンらの周りには2万5千人の死体が横たわっていた。この戦争で、近代文明が中世に勝利したとしても、それは、歴史的な時代の格差の問題のみにとどまらないであろう。

マーク・トウェインは、1891年からアメリカを離れ、1900年に帰国する。

その間ヨーロッパに滞在していたトウェインは、ヨーロッパ列強の帝国主義を知り、祖国アメリカの政治動向にヨーロッパ型の帝国主義にならう危険信号を鋭く感知していた。また、オーストラリア、アジア、アフリカを回る世界旅行の途上、各地で宗主国による原住民に対する残虐な仕打ちを見聞した。そして帰国後発表した“To the Person Sitting in Darkness”（1901年）において、マーク・トウェインは、ヨーロッパ文明に対置して、アメリカ文明を考察したのである。南アフリカで、ボーア戦争を強行したイギリスのジョセフ・チェンバレンを槍玉にあげ、アメリカは、チェンバレン流儀の「ゲーム」をすべきではない、と警告し、アメリカは、アメリカのルールに従った「ゲーム」をしなければならない、とアメリカの独自性を主張した。そして、「文明の恩恵」、「進歩と文明」という旗印を掲げて、「野蛮人」の側の利益を謳い上げながら、実は本心を隠蔽して行う「ヨーロッパ流のゲーム」を模倣するマッキンレイ大統領を批判したのである。

「アメリカのゲーム」で想起するのは、ベースボールは、「われわれのゲームだ。つまりアメリカのゲームなのだ。」といったウォルト・ホイットマンの言葉である。肉体的なストイシズムと精神的な自由をともに味わえるアメリカのゲームとして、ホイットマンは評価したのである。トウェインも、ホイットマンと同様、ルールに従い、フェアを重んじ、同じグラウンドで、同じ道具で対等に技を競い合うベースボールは、アメリカのゲームである、と考えていたにちがいない。マーク・トウェインは、1900年代になって、ますます文明国によるアジア、アフリカ諸国への帝国主義政策批判を強めていくが、コネティカット・ヤンキーに、19世紀のアメリカ文化の活力を映しながら、先見的に、アメリカニズムをイデオロギーとして信じ込む危うさも込めたといえるであろう。

引用文献

- Brock, Darryl. *Mark Twain and the Great Base Ball Match*. Emeryville, California: Havilah Press, 1999.
- Clute, John and Peter Nicholls, eds. *The Encyclopedia of Science Fiction*. New York: St. Martin's Griffin, 1993.
- Cummings, Sherwood. *Mark Twain and Science: Adventures of a Mind*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1988.
- Fatout, Paul, ed. *Mark Twain Speaking*. Iowa City: U of Iowa P., 1976.
- Lamster, Mark. *Spalding's World Tour: The Epic Adventure That Took Baseball Around The Globe — and Made It America's Game*. New York: PublicAffairs, 2006.
- Rowe, John Carlos. "How the Boss Played the Game: Twain's Critique of Imperialism in *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*." *The Cambridge Companion to Mark Twain*. Forrest G. Robinson, ed. Cambridge UP, 1995.
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. Hartford: The American Publishing Company, 1899.
- . *A Connecticut Yankee at King Arthur's Court*. New York: Oxford UP, 1996.
- . *Following the Equator and Anti-imperialist Essays*. New York: Oxford UP, 1996.
- Ward, Jeffrey C. and Ken Burns. *Baseball: An Illustrated History*. New York: Alfred A. Knopf, 2010.
- Welland, Dennis. *Mark Twain in England*. London: Chatto & Windus, 1978.
- Wright, Marshall D. *Nineteenth Century Baseball: Year-by-Year Statistics for the Major League Teams, 1871 through 1900*. Jefferson, North Carolina: McFarland & Company, 1996.
- Wuster, Tracy. "'Interrupting a Funeral with a Circus': Mark Twain, Imperial Ambivalence, and Baseball in the Sandwich Islands." *Mark Twain's Geographical Imagination*. Joseph A. Alvarez, ed. Newcastle upon Tyne, UK: Cambridge Scholars Publishing, 2009.
- Zeiler, Thomas W. *Ambassadors in Pinstripes: The Spalding World Baseball Tour and the Birth of the American Empire*. Lanham, Maryland: Rowman & Littlefield, 2006.
- Zwick, Jim, ed. *Mark Twain's Weapons of Satire*. Syracuse: Syracuse UP, 1992.